

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

取組を進めるに当たり困難であった事例について

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

《人社系》

●一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻、地球社会研究専攻

「キャリアデザインの間としての大学院」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムにより、院生の研究企画に対する研究資金の助成、RAの採用を行い、これらは院生の研究を促進すると共に、院生に対する経済的支援として有益であった。プログラムのその他の授業やキャリア支援でも、院生は学習・研究環境の改善という面で恩恵を受けた。しかし企画実践力強化部門の助成に申請できない、申請しても不採択となった者もあり、高度職業人養成科目を受講しなかった院生もかなりいる。その中には授業料を払うだけの経済的余裕がなく、休学しているために、科目の履修等ができないという院生も含まれている。企画実践力強化部門の研究助成で海外のフィールドワークに20万円の助成を受けても、50万円以上の授業料を払えば、休学しているよりも出費は多くなってしまふ。院生が早く修了できるようにすると共に、研究支援と並んで、生活支援が必要となる場合がある。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

院生の就職状況がよくないため、修業年限を超えて滞留する院生が増加することになる。本プログラムでは、このような状況に対して、院生に必要な研究能力や就職の際に有効なスキルを強化することで、院生が標準の修業年限内で就職できるように意図したのである。しかし研究能力やスキルを高め、キャリア支援を行うだけで全て解決できるわけではない。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

本事業だけでは解決できない問題であり、他の方策と組合せ、連携することで解決の道を模索するしかない。

《理工農系》

●神戸大学システム情報学研究科計算科学専攻、工学研究科

「大学連合による計算科学の最先端人材育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

講義、演習において、受講生のレベルに幅があったため、画一的なカリキュラムでは対

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

E. 学習・研究環境の改善

⑤その他

応ができなかった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

計算科学は、あらゆる研究分野でそれぞれ研究が進められているため、研究分野の異なる学生間では修得している知識やプログラミング技術に大きな開きがある。同一レベルの学生を集めることが困難であった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

講義・演習の前に事前調査を行いクラス別けを試みたが、受講生の数が限られていたことから、本大学院 GP の実施期間中には有効的な手立てを講じることはできなかった。現在は、講義・演習を初級から上級まですべて連続的に実施して、受講生のレベルに合った段階から受講を開始する方法を採用している。